

PREX NOW



途上国と関西をつなぐ VOL.249

特集:PREXシンポジウム2018



前列左から北村記世実氏、坂本達氏、後列左から藤原明氏、後藤健太氏、小野邦彦氏

CHANGEをCHANCEに!

2018年5月7日(月)大阪国際交流センターにて開催したPREXシンポジウム「チェンジメーカーが社会を変える」
~SDGs: 私たちにできること~の報告をお届けします。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
世界を変えるための17の目標



PREXが実施している研修には、研修ごとに目標とするテーマがありますが、研修を受けることが、研修員一人一人が自ら変化を起こすチェンジメーカーになるきっかけであってほしいと考えています。今年のシンポジウムではこの「チェンジメーカー」をテーマに開催し、定員を超える130名の方にご参加いただきました。また、SDGs(エスディー・ジーズ:Sustainable Development Goals-持続可能な開発目標)は、2015年に国連で採択された持続可能な社会の実現に向けた国際統一目標です。途上国だけでなく全世界の各国が、世界が持続可能な社会になるためにそれぞれの立場や組織で課題解決にアプローチしようというものです。PREXは、近畿経済産業局とJICA関西が中心となって立ち上げた「関西SDGsプラットフォーム」に参画しています。



人も野菜も
ひとつひとつ
違っていい。
(小野 邦彦)

銀行を変えたい
その一心で。
(藤原 明)

ちょっとずつ変えることを ライフワークにすれば、いい。

銀行に入って、支店配属の日をやめようと思いました。思っていた以上に「官僚的な」組織だったからです。でも「銀行を変えることをライフワークにしよう」と思えたことで、その後26年銀行員を続け、「銀行を変える」担当になって15年になります。さまざまな企業や団体・クリエイターと連携して小さなものばかりですが、500件のプロジェクトを積み上げてきました。アートなキャッシュカードを作る、FM802とのコラボレーション、古典芸能である上方落語を応援するプロジェクト、アパレル会社さんと通帳ケースを作って通販会社で売ってもらうプロジェクト等です。小さなプロジェクトが繋がって、うねりとなっていきました。これらの経験に基づいて体系化した手法がSDGsにも活用できればと考えています。

藤原 明 氏

りそな総合研究所 リーナルビジネス部長
FM802・大阪府をはじめとする多様な企業連携・
産学連携による「REENALプロジェクト」を展開中。
企業や地域における活性化の取り組みは、各所で
反響を呼んでいる。

続けていくことが難しい。 坂道でボールを押していく感じ。

社会起業家と言われ、すごいことをしているかのように語っていただくこともありますが、実際は泥臭いことの積み重ねです。多くの人を巻き込んで事業を進めているので、逃げ出すわけにもいかずどうにか続けている。そんなのが社会的企業のリアルだと思います。

伝えたいのは、目の前の食べ物と向き合い、野菜の生き物としてのプレを楽しんでほしい、ということ。同じピーマンでも7月のものと10月のものは肉厚さもみずみずしさもまるで違います。品質の安定を追求するのではなく、プレを楽しんでほしい。野菜の多様性を楽しむようになると、人の多様性も受け入れられ、世界が全体として生きやすい社会になると思うのです。

小野 邦彦 氏

株式会社 坂ノ途中 代表取締役
2009年設立。京都市下京区。環境負荷の小さい農業の普及をめざし、新規就農者を中心とした提携生産者が栽培した農産物の販売、自社農場の運営、開発途上国での有機農業普及活動を行っている。

仕事やお金は
取り戻せても
時間は取り戻せない。
(坂本 達)

ガザ難民女性の
刺繍を
届けたい。
(北村 記世実)

※シンポジウムのパネルディスカッション内容をPREXホームページに掲載しています。
是非ご覧ください。<http://www.prex-hrd.or.jp/>

中央アフリカを走っているときに、 分かれ道がありました。

なんとか村にたどり着いて食糧や水を手に入れなければならないのに、地図にはない分かれ道です。判断を間違えると取り返しがつかないと思い、誰かが来るのを待ちました。誰も来ません。30分が過ぎ、迷いましたが、前に人が通った跡のある左の道を選びました。ですが、100メートル進んだところで、分かれ道は一つになっていたのです。

自分の行動力のなさを思い知らされた気がしました。日常の中にも分かれ道は出てきます。

うまくいかなかったらどうしよう、誰かがやってからにしよう、考えすぎて動けなくなることがありませんか？まずやってみる、やりながら答えを出していくというのがあっていいと思っています。

坂本 達 氏

自転車冒険家。株式会社 ミキハウス 社長室 部長
1995年から4年3カ月間、異例の有給休暇扱いで
自転車世界一周、43カ国55,000キロを走破。現在
一家4人で自転車による「世界6大陸大冒険」にチャ
レンジ中。

パレスチナのために 私に何ができるのか。

1999年に医療系NGOのプログラムに参加したことがパレスチナと関わるきっかけでした。人々は貧しくても、明るく優しくホスピタリティーにあふれていて、その精神性の高さに魅了されました。

2001年に、2回目にガザに行ったときには、状況が一変して街は瓦礫になっていました。滞在中に友人が殺されてしまい、パレスチナの人々ために私に何ができるのか真剣に考え始めました。

たどり着いたのが、刺繍です。働き手の夫を失った未亡人や、離婚し安定した収入がない弱い立場にある300人のパレスチナのガザの難民女性たちが作っています。皆さん、是非一度手に取ってみてください！

北村 記世実 氏

パレスチナ・アマル代表
2013年設立。滋賀県草津市。
国連パレスチナ難民救済事業機関による刺繍プロ
ジェクトの製品を輸入・販売。パレスチナの女性たちの
生活支援、雇用創出に取り組む。



身につけた
特技は
「人の力を
借りること」
でした。

チェンジメーカー

坂本 達 氏
自転車冒険家
株式会社 ミキハウス
社長室 部長
(シンポジウム 基調講演者)

どんなに細く小さくても、
続けることで「つなげる」、「つながる」。

後藤：僕は、坂本さんの本を読んでいて、ずっと大ファンでした。ミキハウスさんも懐の深い会社です。
坂本さんは、木村皓一社長に信頼されていたのですね。

坂本：木村社長は、「一人ぐらいそんな奴がおってもええやないか」と、自転車で世界一周する夢を認めてくれました。
今は、家族4人で世界6大陸を自転車で走るチャレンジを応援してくれています。
社長に学んだことは数え切れません。一つは、運や出会いは自分で創って掴まないといけないということです。
入社して間もない頃、社内研修でスキーに行きました。宿泊所でモグラたたきのゲームをしていたとき、
お店の人にお金を手渡さず、台に置いた社員がいました。そしたら社長がすごく叱ったんですね。
人と人がコミュニケーションをとれば、そこで何かを生み出す可能性があるのに、
どうして人と関わらないのだということでした。この時のことはとてもよく覚えています。
仕事をする中では、どれだけ人の力になれるかということをいつも考えています。
朝早く出社し、掃除をすることから始まって、就業時間中に出荷の仕事を手伝うこともありました。
今は人事の仕事をしていて、採用説明会などで他部署の人に助けてもらうことが多いので、
余計にそう思っています。日本人は助けを求めず、自分の力でやろうという尊さがありますが、
「やるだけやった」という前提で、周りに助けを求めるのも目標を達成するために必要なことです。
助けを差し伸べられたら、素直に受けることです。自分一人で、と気負わずに、
人の力を素直に借りることって私も世界一周の経験で学んだことのひとつだと思います。



大事なのは
まわりとの
協働、信頼…

に必要なものは？

後藤 健太 氏
関西大学 経済学部教授
(シンポジウム コーディネーター)

誰かが何かを起こしていかないと、 チェンジは生まれない。

坂本: 大事なのは、「続ける、つなげる、つながる」です。新しいことにチャレンジするときは、エネルギーが集まるので結構できるんですが、社会や自分を取り巻く会社や家庭の環境が変わる中で、続けていくことはとても難しいです。それでもどんなに小さいことでも続けていくことが大事で、それが信頼につながり、次につながっていくと思います。そして、続けていくモチベーションを維持するのは「行動すること」ですね。

後藤: チェンジメーカーの秘訣は、独自性を出す、強みを高めるということだけでなく、まわりの支援を受けながら、活動を続ける「接続力」にあるということを強く思いました。これは、シンポジウムでお話いただいた坂本さんと、3名のパネリストの方に共通するチカラでした。ガンジーの言葉にあります。
「Be the change that you wish to see in the world!」
世の中いろいろな問題があるのですが、それに不満を持って文句を言うのではなく、あなたがチェンジになりなさい。誰かが何かを起こしていかないと、チェンジは生まれないということです。今、日本にはチェンジを受け止める土壌があると思います。やりようによっては、チェンジを引き起こせる人に私たち誰もがなれるということです！

شركة توريد كهرباء الشمال
NEDCO

パレスチナの未来に光を。

林 俊行氏
コースリーダー
ニカ・エナジー・コンサルタント 代表

ラマダン・マリウム氏
パレスチナ北部配電会社

イスラエルからの電力輸入に頼らざるを得ない状況の中、 パレスチナにとって太陽光発電の利用はとても重要です。

2015年から3年間「JICA/パレスチナ太陽光発電研修」でコースリーダーを務めた林俊行です。

研修員には、自分を取り巻く環境に関わらず、自分自身の仕事への取り組み方を変えてほしいという思いで「チェンジメーカーを目指してほしい」と伝えました。研修員に、自分で自分の「暗黙知」を豊かにしていくことができる人、また、関係者と“知識創造プロセス”を通じながら、関わる人の「暗黙知」を豊かにしていくことができる人、リーダーシップを持って人を巻き込む力を持った人になってほしいと考えているからです。

パレスチナでは太陽エネルギーは廃棄物発電と共に唯一の自前のエネルギーで、その活用はとても重要です。太陽熱を使う温水器はすでになんかなり利用されているので、今後、太陽光発電をいかに利用するかが課題です。ある程度の規模の発電が可能な太陽光発電を設置するには広い土地が必要ですが、ヨルダン川西岸地区で人があまり住んでいないエリアは、イスラエルの管轄下にあり、設置許可を取得することが難しい状況にあります。現実的な太陽光発電の設置方法は日本でよく見かける家屋の上への設置です。このためには配電会社の役割が特に重要で、2016年度にこの研修に参加したマリウムさんは、勤務先である北部配電会社で、太陽光発電設置に関する社内マニュアルを職場の仲間と策定するなど熱心に活動しています。ヨルダンで開催された国際セミナーにも参加したそうです。現在は太陽光発電をより多く導入できるように、電力系統解析プログラムを使った系統解析の体制を自社に持とうと努力しています。

パーソナルビリーフに光を。

JICAパレスチナのサヘル氏と
PREX国際交流部 奥村。
パレスチナ資源エネルギー庁にて撮影

研修の狙いは、研修員が何かできるようになるというより、 研修員自身が変わることにあると思います。

この研修を担当した奥村です。2016年3月には、当時JICA専門員だった林氏とこの研修のフォローアップ調査でパレスチナを訪問しました。上の写真は、その時、撮影したものです。研修では、林氏が言われている「暗黙知」を創り出す場をいかに提供できるか、そして、研修員に自分の「パーソナルビリーフ：信念」にいかに関心を持ってもらうかということを考えています。日本での研修期間は長くて5週間です。研修の狙いは、研修員が何かできるようになるというより、研修員自身が変わることにあると思います。なぜなら、研修員は帰国後様々な状況に対応してゆくことになりますが、研修員が変わることで、異なった状況に対し、研修員自ら主体的に考え行動することができると期待するからです。そして、自らを変えていくのには、気づき、特に「パーソナルビリーフ」への気づきが大切です。これが、行動への大きなモチベーションになります。研修員の中には、「パーソナルビリーフ」が明確ではない研修員もありますが、その人の心情を聞く機会を持ち、その人の興味があることを観察して問いかける中で、どの研修員も「パーソナルビリーフ」を持っていることがわかります。これは、研修を担当していて、とても嬉しいことです。ガーナからの研修員は、「ガーナの女性は、電気がなく、真っ暗な中で家事をしている。電気があれば家事の効率が上がり、女性が外に出ていくことができる。女性の地位を向上させるために、太陽光発電の普及に尽力したい」と話してくれました。カメルーンの研修員は、「働いているのは、お金のため」と言っていたのですが、研修が終わって、「日本に来て自分が変わった」といって信念に基づいたアクションプランのレポートを送ってきてくれました。人は、自分自身が気づいていなくても「パーソナルビリーフ」を持っているのです！

NEWS & TOPICS

坂本さんはじめ、パネリストの方々にお会いするまでは、「チェンジメーカー」って特別なスゴイ人なんだろうな、と思っていましたが、お話を聞いて、日々悩み葛藤している私たちと同じなんだと共感し、「私も頑張ろう!」と思えました。そんな思いを少しでも伝えたくて、今号はPREXシンポジウム2018を特集。読者の皆様のチェンジを起こす情熱や勇気につながれば、嬉しく思います。

事務局からのひとこと

フィジー共和国の 帰国研修員 カマル・チェティさんが 大阪商工会議所 貿易・投資セミナー で講演。



JICA研修「2016年度投資促進のためのキャパシティディベロップメント研修(A)」に参加した、フィジー投資庁のカマル・チェティ氏が、6月1日、大阪商工会議所と国際連合工業開発機構(UNIDO)主催の「フィジー貿易・投資セミナー」でフィジーの投資環境とビジネス機会について講演されました。カマル氏は、日本での研修後、投資部長になり、日本企業向けセミナーと日本企業とのビジネスミーティングに出ることも増えているそうです。フィジー共和国は、南太平洋のほぼ中心に位置していて、この地域のビジネスハブとしても注目されています。フィジーへの投資や進出に関心のある方はPREXまで、お問い合わせください。

PREX職員2名 マレーシア、カンボジア、ミャンマーを訪問!



5月16日から26日までPREX職員2名が、マレーシア、カンボジア、ミャンマーを訪問し、帰国研修員のフォローアップと、今年度のアセアンを対象にした研修についての要望を調査しました。詳細は、次号で紹介予定ですので、乞うご期待!(PREX亀田、酒井)



PREXシンポジウム2018、 130名にご参加いただきました!



～参加いただいた皆様の声 アンケートより抜粋～

- 新しいことを始め、さらにそれを続けていくためには、自分の意志だけではなく、周囲の助けや理解が大事であるということに気づくことができた。
- 自分が周囲を変革しようとしている時、多くの障害があるが、励みになるキーワードを得ることができた。
- それぞれの人の熱い想いと周囲の巻き込み力に感心した。
- 仕事だけでなく、日常生活にも取り入れることができるメッセージや視点を、各講演者から聞くことができた。

おススメ図書のご紹介。



「やった。—4年3カ月も有給休暇をもらって世界一周5万5000キロを自転車走ってきちゃった男」(三起商行(株)出版)シンポジウムの基調講演者 坂本達氏の著書です。まだ読んでいない方はぜひ手に取ってみてください! 続編は「ほった。」です。

PREX NOW第249号(2018年7月発行)

編集・発行:公益財団法人 太平洋人材交流センター
専務理事・事務局長:岡本 譲
〒543-0001 大阪市天王寺区上本町8-2-6
大阪国際交流センター2階 TEL.06-6779-2850
ホームページ:<http://www.prex-hrd.or.jp>
E-mail:prexhrd-pr@prex-hrd.or.jp
企画制作:ユナイテッド・トゥモロー